花のまちづくり 優秀事例発表会
2018

平成 30 年 10 月 24 日（水）

日比谷図書文化館　コンベンションホール

主催：公益財団法人 日本花の会

プログラム

12:00	開場
12:50	開会・開会あいさつ
13:00	第 28 回 全国花のまちづくりコンクール審査結果報告
13:15	花のまちづくり優秀事例発表

団体部門　**十文字環境美化を考える会**（秋田県横手市）
団体部門　**長岡市立山本中学校**（新潟県長岡市）
団体部門　**まちづくり宮ノ下地区委員会**（福井県福井市）
団体部門　**長池オアシス管理会**（大阪府熊取町）

15:15	休　憩
15:30	講　演

花のまちづくりスキルアップ
「花の育種…私流」
講師　安藤 敏夫 氏　（千葉大学名誉教授、ガーデンそよかぜ園主）

16:40	コンクール審査講評　　審査委員長　輿水　肇
16:50	全国花のまちづくり南砺大会　開催案内
17:00	閉会

表紙の写真（左から）
・長岡市立山本中学校
・まちづくり宮下地区委員会
・長池オアシス管理会
・十文字環境美化を考える会

第28回 全国花のまちづくりコンクール 審査結果報告

応募者数

応募総数	1,667
市町村部門…	2
団体部門…	1,493
個人部門…	125
企業部門…	47

受賞者一覧

花のまちづくり大賞　農林水産大臣賞

団体部門　長岡市立山本中学校（新潟県長岡市）
団体部門　まちづくり宮ノ下地区委員会（福井県福井市）

花のまちづくり大賞　国土交通大臣賞

団体部門　十文字環境美化を考える会（秋田県横手市）
団体部門　長池オアシス管理会（大阪府熊取町）

花のまちづくり優秀賞　花のまちづくりコンクール 推進協議会長賞

団体部門　F・Cボランティア（神奈川県相模原市）
団体部門　長岡市立桂小学校（新潟県長岡市）
団体部門　富士市花の会（静岡県富士市）
団体部門　ガーデンシティコープ金剛東すみれ会（大阪府富田林市）
団体部門　NPO法人 にじのかけ橋（兵庫県神戸市）
団体部門　名塩さくら台景観緑化クラブ（兵庫県西宮市）
個人部門　城戸 夫巳枝（千葉県浦安市）
個人部門　佐野 誉志照・恵美子（静岡県浜松市）
個人部門　太田 よしの（兵庫県香美町）
企業部門　イオックス・ヴァルト　企業組合（富山県南砺市）

花のまちづくり奨励賞　花のまちづくりコンクール 審査委員会賞

市町村部門　水巻町・水巻町コスモスのまちづくり推進協議会（福岡県水巻町）
団体部門　東成瀬村小中連携教育実行委員会（秋田県東成瀬村）
団体部門　桜川市立猿田小学校（茨城県桜川市）
団体部門　五霞町立五霞中学校（茨城県五霞町）
団体部門　裾野市パノラマロードを花でいっぱいにする会（静岡県裾野市）
団体部門　掛川市立千浜小学校（静岡県掛川市）
団体部門　磐田市花の会 磐田支部（静岡県磐田市）
団体部門　大府商工会議所（愛知県大府市）
団体部門　西宮市立段上小学校 園芸美化ボランティア（兵庫県西宮市）
個人部門　手嶋 眞二（山口県下関市）
企業部門　浜松労災病院（静岡県浜松市）

全国花のまちづくりコンクール 入選

団体部門

南相馬市立原町第二小学校（ 福島県）
常陸太田市世矢中学校（茨城県）
一中地区コミュニティセンター（茨城県）
社会福祉法人征峯会 ピアしらとり（茨城県）
社会福祉法人浦山学園福祉会 小杉西部保育園（富山県）
神山地区自治振興会（福井県）
長野県須坂創成高等学校　野菜・花卉クラブ（長野県）
かわづ花の会　筏場地区花壇（静岡県）
関田東高砂会（愛知県）
咲かそうひまわり（愛知県）
刈谷市小垣江地区自治会（愛知県）
大野木環境保全会（三重県）
ガーデニング倶楽部（兵庫県）
伊丹市フラワーリーダー同好会　和（兵庫県）
明石市立林小学校（兵庫県）
鶉野中町花家族の会（兵庫県）
うずしおの郷地域振興協議会（兵庫県）
水戸市立三の丸小学校（茨城県）
大子町立さはら小学校（茨城県）
潮来市ボランティアグループ D-51（茨城県）
小江川自治会（埼玉県）
中郷地区婦人会（福井県）
おもてなし花壇グループ（福井県）
みんなの居場所 くつろぎカフェ「かいらハウス」（静岡県）
小幡緑地公園サンサン会（愛知県）
春日井市立岩成台中学校（愛知県）
いきいき刈谷友の会　ガーデニング部会（愛知県）
がまごおり花フル会（愛知県）
ITO×UR　みんなの庭プロジェクト（大阪府）
尼崎市立南武庫之荘中学校（兵庫県）
フラワーリーダー 8 期生（兵庫県）
ガーデン苅尾（兵庫県）
網干公園みどりの会（兵庫県）

個人部門

山田 みね（群馬県）
吉塚 志津恵（愛知県）
末松 和佳子（兵庫県）
髙見 尚子（兵庫県）
諏訪 早苗（兵庫県）
黒木 誠子（宮崎県）
髙井　昭（神奈川県）
三好 一弘・友子（三重県）
奥川 きみ子（兵庫県）
尾花 幸雄（兵庫県）
中谷 邦子（兵庫県）
植田 喜代子（静岡県）
藤田 幸一（三重県）
髙木 繁嘉（兵庫県）
三村 雅之（兵庫県）
間森 和生・ゆり子（兵庫県）

企業部門

まごころでい藤枝南（静岡県）
株式会社 ホテルサンバレー（静岡県）
大阪信用金庫（大阪府）

全国花のまちづくりコンクール 努力賞

【若葉賞】

団体部門　厚木市学生ボランティア団体「ぼくら」（神奈川県）
団体部門　小瀬戸花いっぱいの会（静岡県）
企業部門　東京ステーションシティ運営協議会・株式会社 鉄道会館（東京都）

審査講評

コンクール審査委員長　輿水　肇

今年は全国から1,667件の応募がありました。応募くださった方にはお礼申し上げます。
また、受賞された皆さんには、この度はおめでとうございます。
心より祝福申し上げるとともに日々の花のまちづくり活動に敬服いたします。

花壇のまわりの景観にも気配りする

このコンクールは1990年に大阪市で開催された国際花と緑の博覧会（略称、「花博」）の理念「自然と人間との共生」を継承する事業として1991年に始まり、今年で28回目となりました。コンクールが始まった頃と今の花壇を見比べてみると、そこに植えられている花の種類がだいぶ変わってきています。当初はサルビアやマリーゴールド、ベゴニア・センパフローレンスを主とした、色のはっきりした花壇が多かったように思います。2000年代に入りガーデニングブームが下火になり始めたころから、パステル調の色彩の花壇や一年草と多年草、バラなどの低木の花木類を組み合わせた、多様な色調の花や葉が織りなす花壇が主流となってきました。また、近年では気候の変化もあって、暑い夏を乗り越えられる花が増えてきています。インターネットを利用して最新の花壇づくりの情報を入手し、インスタ映えするような花壇も応募の中では散見されます。

気候の変化や活動の形態の変化があった場合は、花の種類や花壇の大きさを変えることで、ある程度はその状況に対応できますが、花壇の周辺にある目障りな広告や立て看板など、雑然とした景観への対応が遅れているように感じます。特にインスタ映えを狙った花壇は、カメラのフレーム内のことばかりに意識が集中してしまい、花壇の周囲の景物との調和がおろそかになっています。

このコンクールでは、花壇が周囲の景観と調和しているかが審査のポイントのひとつになっています。花壇のまわりにも気配りして、視野を花壇にだけ向けるのではなく、花壇が地域の景観に溶け込み、花が見栄えするようになっているか、もしそうなっていなければ、花壇の周辺も整理するような広い視野をもちながら活動しなければいけません。これには行政との連携が不可欠なので、行政とも対等で良好な関係を持ち続け、花やみどりできれいなまち並みを住民側から築けるよう取り組んでみてください。花壇の周りの雑然さが整理されれば、花壇は今以上に美しく花も生き生きとしてくることでしょう。

地域愛を育みボランティア精神が支える

さて、受賞者に目を向けてみると、活動の組織や人の属性、花壇づくりなどは異なるにもかかわらず、共通している面もあります。具体的には花のまちづくりに関わる人の地域をよくしていこうという強い地域愛と花への深い愛情が共通しています。

大賞受賞の**長岡市立山本中学校**は、地域の花のまちづくりを30年以上に亘って牽引しています。中学生の時から花を介して地域とともにあるという学校の伝統が、生徒たちには自ずと地域愛を目覚めさせています。**まちづくり宮ノ下地区委員会**は、農家組合が話し合いで米作の減反による休耕田を集約して17haものコスモス広苑を実現しています。耕作地に執着の強い農家の方が休耕田の集約化を図るということは、並大抵のことではありません。その原動力は地域を輝かせたいという地域愛がもとで、コスモスまつりに向けた住民の結束に結実しています。**十文字環境美化を考える会**は社会的な環境が変化して町が活力を失いかけ、住民も地域への意識が薄らいでいましたが、地域で協力して人が集まる場所に花壇をつくり、生き生きとした花を咲かせたことで、住民の心に再び地域愛と自信を灯しました。**長池オアシス管理会**は中世から米作の灌漑施設として活用し、大切に保全してきたため池の環境悪化を憂いて、改修を機に地域の宝として磨きをかけるべく、ハスを中心とした長池の保全活動を始めました。関係者の地域愛を長池に集中させることで活動が地域愛とともに伝播し、広まる仕組みが協働で築かれました。

地域愛は大賞受賞者に限らず、コンクールに応募のあったそれぞれの活動に見られますが、活動を支えるものは見返りを求めないボランティア精神です。地域愛とボランティア精神が花のまちづくりの中で徐々に育つことが、活動を発展させ質を高めさせ、いい成果が得られることにつながります。

優秀事例発表

合言葉は『花と対話する山中生』～花がつなぐ ふるさと やまもとの輪！～… P.6

花のまちづくり大賞 農林水産大臣賞
団体部門　長岡市立山本中学校（新潟県長岡市）

住民の夢をコスモス畑で咲かせる…… P.8

花のまちづくり大賞 農林水産大臣賞
団体部門　まちづくり宮ノ下地区委員会（福井県福井市）

花で彩るまちづくりを目指して…… P.10

花のまちづくり大賞 国土交通大臣賞
団体部門　十文字環境美化を考える会（秋田県横手市）

地域に愛される緑のオアシス…… P.12

花のまちづくり大賞 国土交通大臣賞
団体部門　長池オアシス管理会（大阪府熊取町）

団体部門　長岡市立山本中学校（新潟県長岡市）

合言葉は『花と対話する山中生』　～花がつなぐ　ふるさと　やまもとの輪！～

活動のきっかけと活動概要

山本中学校の校区は花を育てている家庭が多い地域です。1987（昭和62）年、創立40周年を記念して、約250㎡の花壇が作られたのを機に、それまで以上に花壇活動が盛んとなりました。以来、「山本中学校花いっぱいプロジェクト」と題し、土作りから花苗植え、花壇の手入れは生徒会が中心となり、全校生徒と職員が協力して活動しています。その年の花活動のテーマを全校生徒で考え、テーマにふさわしい花壇のデザインも考えています。また、地域の福祉施設や公共の施設と花を通した交流活動を継続的に行うなど、花による地域活性化を意識した中学の伝統的な活動として取り組んでいます。

活動で努力している点

当校は、周囲を木々で囲まれた小高い丘にあるので、多くの人々から花壇の景観を目にしてもらう機会が限られています。そこで、日頃の花活動を PR しながら、活動の場を地域に広げる工夫をしています。

（1）積極的に出向いて一緒に花活動

地域のコミュニティセンターとの連携が最も大きく、市の緑化センターや花いっぱい協議会が主催する活動に参加する他、近隣の福祉施設や特別支援学校にも出向いて活動を PR するとともに、花を通じた交流をしています。単発の取り組みでなく、継続的な取り組みとなるよう協力関係を築くことで、人と人、地域と地域の繋がりが広がりました。

（2）オリジナリティを生かした PR 活動

当校には、花活動キャラクター「はなちゃん」がいます。校内だけでなく、様々な活動の場に登場し、地域と学校、市や県など自治体と学校、さらには人と人とをつなぐ一助を担っています。

（3）弱点を強みに

当校は全校生徒56人、教職員をあわせて約70人の小規模校です。生徒数の減少傾向は続いていますが、逆に学年を超えて生徒が一丸となり、生徒と職員がともに汗を流し、そして、地域から支援の力をいただくことで、一体感をもった活動となっています。結果として、伝統的な「花との対話」を途切れさせず、「花の郷やまもと」の DNA を受け継いでいます。

● 前回受賞時との違い

昨年、花のまちづくり優秀賞を受賞しました。その中心的な取り組みは、2004（平成16）年の

豪雨による水害、さらに同年の10月には中越地震に見舞われた当時の山本中学校の生徒が、被災した地域を花で元気づけようと、約600個の花プランターを地域に届けた活動にならい、100個以上の花プランターを通学路や公共施設、家庭にプレゼントし、地域を花で活気付けようと取り組みました。

今年は今まで以上に活動を発展させようと、地域のコミュニティセンターとの連携を強化し、地域の「山本花いっぱいフェスティバル」に全校生徒が参加しました。さらに、同日開催の山本中学校花いっぱいプロジェクト親子花壇活動には、地域の方の参加が前年の2倍以上となりました。地域がひとつとなり、一緒に活動することで、「やまもと花活動Day」となりました。

そして、地域と一体となった花のまちづくり企画として、昨年収穫したカンナの種と球根から、カンナプランターを作り、各町内で育ててもらいました。また、全校生徒で、たねダンゴ「しあわせのやまもとはなだんご」を作り、町内の方々にプレゼントした他、たねダンゴプランターをカンナと一緒に育ててもらいました。各町内の協力のおかげで、町中がカンナとたねダンゴから育った花でいっぱいになりました。

これまでも地域とともに花活動を継続してきましたが、地域と一体となった「花の郷やまもと」に大きな一歩を踏み出すことができました。

活動の成果

毎年、生徒は1年間の活動のふりかえりを行っています。その中で、「思いやり」「協力性」「責任感」が、年度当初より成長できたと全生徒が実感しています。また、「花活動を通して地域に貢献したい」という声が年々増えています。今回のように地域へ出かけ、地域の方と地域のために花活動を行ったことで、「地域に貢献できた」という満足感も得ています。また、地域で育てていただいている花プランターを登下校の際に目にすることで、地域への感謝の気持ちも高まっています。花活動を通した地域との関わりは、当校の教育活動の根幹の1つとして位置づけられています。花を育てること、地域に貢献しようとすることを通じて、生徒は心の成長を続けており、「花育」の重要性も実感できています。

今後の展開

「全国花のまちづくり長岡大会」(2016年)以来、地域とともにさらに花活動を発展させようと努力しています。毎年、新たな企画を取り入れることで、山本中学校の生徒が「地域の花活動リーダー」として、そして、山本中学校が「花の郷やまもと」の発信基地として、まちぐるみの花活動をさらに推進していきたいと思います。そのためにも、原点である「花と対話する山中生」の精神と地域への感謝の思いを忘れずに、日々の花活動に取り組んでいきます。

団体部門　まちづくり宮ノ下地区委員会（福井県福井市）

住民の夢をコスモス畑で咲かせる

活動のきっかけと活動概要

1993（平成５）年に一軒の農家が、減反の田んぼにコスモスの大きな迷路を作りました。きれいに咲き誇るコスモスの中に子どもたちの笑い声が飛び交い、沢山の人が訪れて楽しい交流の場となりました。このことがきっかけでコスモスへの関心が地区内で高まり、次年度より休耕田でコスモスを育てる取り組みが始まりました。面積は年々広くなり、現在では17.5ha、東京ドーム4個分の広大な「コスモス広苑」となりました。

田んぼを所有する数十軒の農家の意見を一つにまとめるまでには多くの問題や課題がありましたが、話し合いを重ねることですべての農家が取り組みに賛同し、力を合わせたことが、この活動の原動力になりました。

“日本一広いコスモス畑”とテレビ放送で取り上げられたことなどで、年々コスモス観賞の観光に訪れる人が増えました。そこで畑の一部に「世界のコスモス園」を設けて、珍しい色や形のコスモスの花を咲かせたり、荷台にシートを取り付けたトラクターに、お客さんを乗せてコスモス畑の中を走る「花トラ車」を考案したり、ジャンボかぼちゃを栽培して展示するなど、来苑者に楽しんでもらえるよう、年ごとに試行錯誤を重ねて取り組んできました。

10月初旬に行う「コスモスまつり」は1995（平成７）年に始まり、今年で24回目となります。

まつりの当日は「ジャンボかぼちゃの目方当てクイズ」や太鼓、ダンスなどのイベントの他、地元で採れた新鮮野菜やかきもち、大学芋、コスモスサイダーなどのテント販売、コスモスを使った押し花教室など、地区を挙げてまつりを盛り上げます。

やがて花の時期を終えたコスモスは田んぼの土にすき込まれ、次年の米作の良質な肥料になります。翌年のコスモス広苑は場所を変えてまた出現するのです。

活動で努力している点

農家組合が中心となって取り組んできたコスモス広苑も 20 回を迎えた頃から、その将来に不安を抱えるようになってきました。この活動を始めた人たちは年齢を重ね、農家の世代交代もできない状況にあったからです。

そこで、「ここまで頑張ってきたコスモス広苑をなくすことはできない」とまちづくり宮ノ下地区委員会が引き継ぐことになりました。当委員会は、育成会、壮年会、婦人会などの各種団体を傘下に組織されていて、コスモス広苑は宮ノ下全町内の子どもから高齢者までが、こぞって参加する活動へと広がりました。

6月の種まき、草取りなどの作業は地区の住民総出で行い、コスモスは夏の日を浴びて大きく育ち、9月中頃から開花し始めます。コスモスの見頃は 1ヶ月間ほどですが、この間を最高のものにするために、私たちは一生懸命に世話をします。猛暑の中での水やりや草取りは大変ですが、作業後の爽快感は格別です。ともに汗を流した仲間とのつながりは深くなり、楽しい交流の場ともなっています。

また今年は、今まで地域住民だけで行って

いた種まきを福井市民にも呼び掛けて、体験会を初めて開催しました。景観を楽しむだけでなく参加してもらうことで、さらに地域の魅力の発信になると思っています。

活動の成果と今後の思い

一軒の農家から始まったコスモス広苑は、今では多くの観光案内にも載せていただくようになりました。かつては話題にのぼることの少なかった宮ノ下地区が、今では「宮ノ下といえばコスモス」と言われるようになりました。今年、地元の中学生が修学旅行先の東京でコスモス広苑のPRをしてきてくれました。子どもたちにとっても地域の誇りとなっているのです。

20 数年前からコスモス畑で遊んで育った子どもたちは、今では頼もしい活動の担い手になりました。コスモスは美しい景観だけでなく地区住民としての誇りも伝えています。

「住んでいてよかった宮ノ下、住みたくなるまち宮ノ下」が私たちのスローガンです。毎年いつ花が咲くか、台風で倒れないかと不安との隣りあわせですが、秋には一面の見事な花の絨毯となるのを楽しみに、これからもコスモスを中心としたこの取り組みを、地域の宝として頑張ります。

団体部門　十文字環境美化を考える会（秋田県横手市）

花で彩るまちづくりを目指して

活動のきっかけ

「秀麗無比なる…。」と秋田県民歌の一番一小節に歌われている鳥海山は、我がまちからの雄姿と眺望が素晴らしく、何かにつけて本県のシンボルの対象とされます。古来、秋田富士とも呼ばれるこの山は、夏場でも多くの残雪があり、横手盆地の山並みの中でもその存在感が際立っています。

本県は高齢化と人口減少率が全国一で、その現象が顕著となっているのが横手市です。このように危機的な状況にありますが、「俺もやらない、お前もやるな」という本県の気質が、そのままで取り残されているような印象を受けています。

十数年前に仕事を退き、町を散歩する機会が多くなってきました。その中で目にする光景は、「衰退していく商店街、増え続ける空き家、荒れる休耕田」等で、町の全盛期を知っている私にとって、大きな寂しさを感じていました。

そんな時、ふと見たテレビ番組で「住みたいまちベスト3」のアンケート調査結果を放映していました。

① 働く場所のあるまち
② 子どもを安心安全に育てられるまち
③ 花や緑が多くあり安らぎを感じられるまち

どの項目を見ても我が町には当てはまらないものばかりでした。それでも、もしかしたら「街に花や緑を増やす」ことができるかもしれないという思いが脳裏に浮かんできました。それは長年の間、『環境は人をつくる』をモットーに、学校環境緑化活動に携わってきた経験があったからです。

活動の概要と困難点の克服

2007（平成19）年に「十文字環境美化を考える会」が設立されたのを機会に、その中にボランティア組織を発足させました。花壇づくりや桜の植樹に取り組んできましたが、クリアしなければならない問題が多く、間もなく活動が行き詰ってきました。その状況を活動する上で克服できなかった困難な点を挙げれば、①何をするにも許可が必要、②ボランティア仲間が増えない、③苗や肥料を買う経費の捻出、などでした。

その様な折に、市報に「地域づくり協議会」を発足させるので一般市民から4名ほどの公募がありました。これに応募し、その一員として4年間活動してきました。この会の中で自分たちの描いていた「花で彩るまちづくり」のプランを具体的に提示し、各委員の賛同を得ながら大きく前進させることができました。この協議会は、①まちがよくなることを提案できる、②決まったことは尊重してくれる、③協議会独自の予算がある、という特性を持ち、これまでやり遂げられずにいたことが現実化していき、現在の「花で彩るまちづくり」の基盤となり充実した活動に結びついています。

花壇づくりにあたって配慮していること

花壇づくりにあたって、次の事柄に配慮して活動しています。

- 花壇はできるだけ人通りが多く人目につきやすい場所につくる。
- 土づくりを大切にし、堆肥や腐葉土、また、EM 菌を多く用いている。
- 花苗は乾燥や病気に強く、長く咲き続け安価なものにしている。
- 平面な花壇は立体的に、直線の花壇は曲線になるように植栽を工夫する。
- 見る人たちに飽きさせないように、毎年ひと工夫している。

活動の成果と波及効果

- 「お疲れ様」「散歩が楽しみです」「期待しています」等の声が聞かれる。
- 雑草地が花の大地に変ってから、ゴミや空き缶を捨てる人が減少している。
- シンボル花壇の効果が各町内や集落に広がりを見せてきている。
- 「俺らほは何も無い所だ」とよく言う。しかし、今は少し違ってきている。
- 何事も他人任せの県民病が少し良くなってきたように感じている。
- 地域の方々に「感動」と「感激」を与え、大変「感謝」されている。

今後の展開

- 面的な展開になるまでは困難ですが、点から線になるように花壇づくりを推進する。
- ボランティア委員が負担にならないように事業者や集落の方々を巻き込む。
- 前年度の反省を踏まえ、さらに魅力度アップの花壇を推進する。
- 学校関係との連携を密にして、ふるさと教育の充実と郷土を愛する心を培う。
- 花壇づくりを通して「花の輪・人の輪・心の和」をまちに広げていく。

第28回全国花のまちづくりコンクールにおいて、花のまちづくり大賞を 受賞したことは「無から有を生み出した努力」が報いられた気持ちで感無量です。この受賞を大きな励みとして、さらに「花で彩るまちづくり」を推進し、今後も更なる魅力度アップのまちづくりに、微力ながらも関わっていける集団であり続けたいと強く思っています。

最後にこの紙面をお借りして、秋田県雄物 筋土地改良区、道の駅十文字から花のまちづくりへのご協力とご支援を頂きましたことに感謝申し上げます。

団体部門　長池オアシス管理会（大阪府熊取町）

地域に愛される緑のオアシス

活動のきっかけと活動概要

長池オアシスは大阪府と熊取町が、ため池を農業用施設として活かしながら、周辺住民も利用できるような「水と緑に囲まれたオアシス」として整備できないかと考え、オアシス構想*1における「住民参加」の考えから、多くの人が話し合って計画し、施工されました。

2000(平成12)年11月にオープンしてからは、水利組合、周辺住民と池周辺の6自治会の役員が「長池オアシス管理会」の役員を担い、ボランティアで活動しています。

本会の主な仕事は、貸し農園の管理、遊歩道の清掃、草刈り、花壇の手入れ、夏と秋のイベント開催、近隣小学校に環境学習の場を提供する、大阪観光大学とボランティア活動による単位認定協力などです。長池オアシス内にある121区画の貸し農園の利用料を、熊取町が委託金として本会へ交付し、それを活動財源としています。

*1 「オアシス構想」とは、ため池や水路を農業用施設として活かしつつ、都市生活に“うるおい”と“やすらぎ”を与える貴重な環境資源として、住民と共に地域環境づくりを進めていく構想です。1991(平成3)年大阪府策定。

活動で努力している点

本会は熊取町から活動費が出ているとはいえ、メンバーの活動は完全なボランティアです。そのため、実際に維持管理活動を始めると、個人の身体的負担が多く、次第に中心メンバーが減っていきました。そして、徐々に長池の環境が悪化していきました。

2003(平成15)年5月20日に、熊取町内で当時小学4年生の吉川友梨ちゃんが、何者かに誘拐されました。のどかな町に起った突然の凶事に、住民の誰もが戦慄を覚えました。連日捜索活動が行われ、地域住民も捜索に協力しましたが、残念ながら現在も発見に至っていません。

この事件の発生以来、子どもを安全に守り育てる環境、地域住民の繋がりの重要性などを多くの住民が実感しました。環境が悪化したままでは、長池オアシスが地域の憩いの場になるどころか、危険な存在になってしまうことを危惧した近隣の住民が、会の活動へ積極的に参加するようになりました。

それから3年間は、会のメンバー全員で環境を整える作業に明け暮れました。しばらくすると、メンバーが汗を流す姿を見た、オアシスの利用者側の意識も変わってきました。中には「何か手伝える事は無いか。」と聞いてくれる人も出てきました。会のメンバーだけでなく、多くの人にも広く維持管理活動にかかわってもらうため、本会のサブ組織として、オアシスメイツを立ち上げました。

折角だから、長池オアシスを人気観光スポットにしようとも考え、観光の目玉として当初より水生植物帯に植えられていたハスの育成に力を入れました。専門家にアドバイスを仰ぎ、試行錯誤の結果、現在では夏になると水生植物帯一面にハスが咲き誇るようになりました。

さらに嬉しいことに、長池オアシスで新種のハスが咲き、専門家に‘長池妃蓮（ながいけひれん）’と名付けていただきました。

活動の成果

会の活動が軌道に乗る事ができたのは、大阪府と熊取町の支援が大きかったからです。普通なら「行政がつくり、その後民間へ渡して終わり。」という運営の形態が一般的でしょうが、長池オアシスにおいては、大阪府と熊取町の歴代担当者が一緒に汗を流し、今も会の活動をバックアップしてくれています。

夏には熊取町内外から 3,000 人もの人がハスを見に来られます。地元の老舗和菓子の会社に、長池オアシスで採れたハスの実を使った和菓子を創作していただき、ハスまつりの時期の名物になりつつあります。

また現在は、歴史と伝統のある泉州タオルとコラボレーションして、ハス柄のタオル等を製造販売する企画をしています。

秋には、近隣小学校の課外活動の場の提供、地元住民による楽器演奏会など芸術・文化的なイベントを開催し、好評を得ています。

オアシスメイツは近隣の主婦、退職後の男性など約 80 人となり、毎月 2 回の維持管理活動だけでなく、イベントにも積極的に参加してくれます。数人の有志は、長年ポイ捨てされたタバコやゴミを毎日拾ってくれています。

長池オアシスは清潔なだけでなく、四季折々の花が咲き、年間約 13 万人の来場者の心を和ませてくれています。

活動の成果を以下に列記します。

・地域の環境保全意識の高まり
・生きがいにつながる住民の社会参画
・住民・行政・企業の協働によるまちづくり
・教育的側面

すべてにおいて良い成果がでています。

今後の展開

大阪府下には 1 万 1 千個のため池が存在し、その内の 6 割が泉州地域にあります。現在、近隣地域のため池管理者と協力して、泉州をハスでいっぱいのロータスランド（極楽）にしようと計画しています。これからも、長池オアシスを多くの方にアピールしていきたいと思います。

花の育種…私流

千葉大学名誉教授・ガーデンそよかぜ園主　安藤敏夫

ここでは園芸の専門家以外の、多くの花好きの方々にお話させてください。

私が「その花をつくった人」と話すと、「その花を栽培した人」と理解される方が多いのかもしれません。しかし、私は「その花を創った人」としか話さないのです。
「創る」とは創造すること、ここでは新しい花を創ること、つまり育種することです。「育種」という言葉にも理解されにくい面があるので、私が「この花はAさんが創った」と言っても、「Aさんが育種した」と言っても、ぜんぜん理解されていないことがあります。困ったものです。

● 全ての花には作者がいる

市販の花には、それを栽培した人がいるのは当然ですが、その前に、それを育種した人(育成者という)もいるのです。野菜などには「顔の見える商品」というのがありますが、そのどれもが栽培者の顔であって、育成者が顔を見せることはありません。

特許法の植物版である種苗法が保護するのは、育成者の権利ですから、育成者は農水省の公式文書に公表されています。しかし、それが広く伝わることはありません。美しい花があれば、その育成者にも思いをはせるべき、と私は思います。

● 開発なき産業は滅びる

「開発なき産業は滅びる」という心に重い言葉があります。花の産業で、最も重要な開発行為は育種でしょうから、花の生産者に向かって、経営を安定化させるために、自ら育種することを勧めてきました。これが「生産者育種」です。四半世紀を経て、気付けば、先進的な生産者の多くが、生産者育種の成果を経営の柱にしていたのです。どうやら、うまくいったようです。花の生産者といっても、育種のプロではありませんから、高度技術は使っていません。生産者育種を普及した際のポイントを紹介しましょう。

profile
安藤 敏夫（千葉大学名誉教授、ガーデンそよかぜ園主）

千葉大学園芸学部で 32 年間教鞭をとられ、その間、ペチュニア属の遺伝資源に関する多くの研究と教育、業績を残す。また、花き業界の発展のためにオピニオンリーダーとなり、発信された数々の提言等は、将来を見越し示唆に富んでおり常に注目される。退官後は 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに訪れる世界中の方々を開催期間中に咲く日本らしい花で迎えようとキキョウの育種と生産に力を注ぐ。

● 花に恋するなかれ

市販の花に満足している方には、育種はできません。花を見て「かわいい♥♥♥」…恋した途端、育種の目は閉じられてしまいます。一方で、「かわいいけどねえ」と、一歩引いて客観的に花を評価できる方には可能性があります。

「人の創ったものを買ってきて使う、という仕事に飽きた。私の花を創りたい。教えて下さい。」と研究室を訪ねてきた人がいました。3年かけて彼女はペチュニア‘さくらさくら’‘桃色吐息’を創りました。

● 妄想族

「こんな子を創りたい」と、夢を見る、妄想する、目標を定めるのは大いに結構です。しかし、想定外の変り者が生まれるのが常です。しかし、それは世界に一つの子ですから、隠れた能力を見抜いてあげてください。

● 知識

育種するには「メンデルの法則」を知っておいた方が便利です。優性、劣性、ホモ、

ヘテロなどの用語に自信のない方には、高校の生物の教科書をお勧めします。

● 種子系と栄養系

市販の花には、種子から育てられる「種子系」と、挿芽や接木で育てられる「栄養系」があります。生産者に勧めたのは「栄養系」の育種です。「種子系」の育種は手間がかかり、ノウハウも必要なので、お勧めしません。「栄養系」の場合、望ましい個体が一株生じれば、育種は終わりです。組織培養による増殖が普通になったこともあり、これまで種子系であった花を栄養系にする傾向が世界的に進んでいます。

● 変異の多い栄養系を

栄養系なら何でもいい、ということではありません。特に「海外で品種の発達した栄養系」が狙い目です。沢山品種があるのに、今更どうして…という疑問は当然ですが、品種が多いということは、変異が多いということで、変異を利用するのが育種ですから、変異がなければ新品種は誕生しません。

多くの実生の中から、あなたの感性に合う個体を選ぶのですから、心配はいりません。感性の違う日本人の選ぶ個体は、欧米人の選ぶ個体とは全く別になるはずです。

● 統分類学の知識と交配

科・属・種・園芸品種という植物の分類単位を理解して下さい。交配して雑種を得ることを交雑といいます。

ある植物に、別の科の植物を交雑するのは、まず無理。同じ科の別属を交雑するのは、運が必要。同じ属の別種を交雑するのは、可能な場合もある。同じ種の別品種を交雑するのは可能…こんな基準でしょうか。

● 生産者育種の段階

生産者育種の段階を独断で整理してみました。

第 1 段階：実を見つけたので種をまいた。
第 2 段階：同一種の品種を並べて咲かせ、実ができたので種を播いた。
第 3 段階：園芸品種と同一属の別種を並べて咲かせ、別種に実が出来たので種を播いた。
第 4 段階：手で交配して実ができたので種を播いた。

第1段階など、育種と言えるレベルではありませんが、それでも成果は出ているのです。一世を風靡したアジサイ‘ミセスクミコ’やスパティフィラム‘メリー’は第1段階で得られた品種です。

● まかぬ種は生えぬ

京都のいろはかるたの「ま」は「まかぬ種は生えぬ」だそうです。花の育種の第一歩は種を播くこと。

種を播いて、最初の花が咲いたからと、ある生産者が私を招きました。そこにはすばらしい花が咲いていました。その時、私が「実生（みしょう）は裏切らないよ」と言ったそうです。彼はそれを名言と確信したそうです。

彼のように、最初の実生で成功を収める例が非常に多いのです。不思議なことですが、ともかく栄養系の種を播く人が少なかった、ということなのでしょう。沢山播きましょう。下手な鉄砲も数打ちゃ当たります。

第25回 全国花のまちづくり南砺大会　開催案内

全国花のまちづくり地方大会とは

花のまちづくり推進協議会では、花のまちづくり運動を全国へ
普及・啓発することを目的に、毎年、地方公共団体との共催による
全国花のまちづくり地方大会を開催しています。

花のまちづくりコンクール推進協議会の構成４団体

・公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会
・公益財団法人 都市緑化機構
・一般財団法人 日本花普及センター
・公益財団法人 日本花の会

第25回 全国花のまちづくり 南砺大会の概要

日　程

2019年 7月6日（土）　南砺市福野文化創造センター　ヘリオス

○アトラクション
○事例発表　花のまちづくりの取り組みについて
○特別講演　辻本智子 氏（「奇跡の星の植物館」プロデューサー）
○交流会　　ア・ミューホール

2019年 7月7日（日）

○現地見学会
　南砺市園芸植物園
　イオックスアローザ
　世界文化遺産「五箇山の合掌造り集落」
　日本遺産「木彫刻のまち井波」

お申し込み先・お問い合わせ先

〒９３９－１８９２
富山県南砺市城端１０４６（南砺市農林課）
第25回 全国花のまちづくり 南砺大会 実行委員会事務局
TEL　　0763－23－2016
FAX　　0763－62－2112
E-mail　norinka@city.nanto.lg.jp

MEMO

公益財団法人 日本花の会

〒107−8414　東京都港区赤坂 2−3−6　コマツビル
TEL 03−3584−6531　FAX 03−3584−7695
http://www.hananokai.or.jp/